



写真3 刀八毘沙門天像



写真2 白衣觀音像



写真1 青不動像



写真6 歡喜天尊像



写真5 勢至菩薩像



写真4 地藏菩薩像

岡山藩主の祈禱寺・常住寺所蔵資料の紹介

岡崎 有紀

—池田宗政の書画を中心に—

はじめに

岡山藩主池田家の祈禱寺であった常住寺には、藩主ゆかりの書画・仏像などが多数伝わっている。中には藩主自身の制作した書画もあり、その中でも四代宗政（享保一二年〔一七二七〕—宝暦一四年〔一七六四〕）の資料は一三件が現存する。

岡山藩主と言えば、二代池田綱政（寛永一五年〔一六三八〕—正徳四年〔一七一四〕）、三代継政（元禄一五年〔一七〇二〕—安永五年〔一七七六〕）、五代治政（寛延三年〔一七五〇〕—文政元年〔一八一八〕）をはじめ、書画をよく嗜んだことで知られる。しかしながら四代宗政については、三八才の若さで亡くなったことから、その画業は広く知られていない。近年、槌田祐枝氏が林原美術館所蔵の池田宗政の資料について紹介を行い、その画業がようやく脚光を浴びて来ているものの、その多くは藩主の嗜みとして描かれたもので、和歌や花鳥図、人物図などが主である^①。一方常住寺に伝わる資料は、祈りのために奉納された仏画・写経などである。

よって本稿では、常住寺が所蔵する宗政の書画を紹介することに より、その画業における新たな側面を明らかにしたい。併せて常住寺と藩主の関わりについても紹介する。

一 資料の概要

現在、常住寺に伝わる宗政関連資料は一三件であり、このうち七件が仏画、五件が経典、一件が神号の書軸である。次にその概要を紹介する。

〈仏画〉

① 青不動像 絹本着色 掛幅装 一幅 (写真1参照)

制作年 江戸時代 宝暦九年(一七五九)

法量 縦八七・〇cm 横三九・一cm

画賛・落款 有禱病愈故写真之／宝暦九己卯歲五月晦

源宗政(墨書)「號曰恒岳」(朱文方印)「岳□□」(朱文方印)

図像・表現

火炎をまとい岩上に立つ青不動を描く。天地眼で牙上下出し、巻髪を逆立てる。右足に重心を置き、右肩をやや上げながら上半身を左側へ捻る。右手に剣、左手には縋索を握る。身色を青とし、肉身線は墨線で表し描き起こしを行わない。炎の動きに合わせて縋索や下衣の裾が画面右斜め上へ流れ、動きのある描写をみせる。肉身を柔らかな墨線で描く一方、条帛や上膊に結ぶ白布は直線を使い堅

く締め上げ、画面に緊張感をもたらしている。火炎の先端部分は均等な間隔で並び形式化が認められる。

② 白衣観音像 絹本着色 掛幅装 一幅 (写真2参照)

時代 … 江戸時代 宝暦九年(一七五九)

法量 … 縦九四・四cm 横三七・五cm

画賛・落款…(右端) 予病得愈茲一周有/禱敬画

(左端) 宝暦九年^{己卯}年七月四日/円務院寄附之

(左下端) 宗政(墨書)「恒岳」(朱文方印)

画像・表現…

海上の岩上に草を敷き、その上に坐す白衣観音を正面観で描く。

観音は右肘から先を傍の岩上に置き、左手は衣の中に隠す。足は右足を上にして緩く組む。白衣観音像は岩上に斜め向きに坐り、瀑布を眺める姿で描かれる例が多い。本図が正面観で表されるのは、手本があったと思われる⁽²⁾。正面観で描く例としては、細部の表現は異なるものの「絹本墨画白衣観音図」(重要文化財、愛知・妙興寺)などがある。

観音の背景には瀑布を表さない。観音の身色は肌色で、肉身線は墨線である。岩肌の表現には水墨画学習の成果が見られる。

③ 刀八毘沙門天像 絹本着色 掛幅装 一幅 (写真3参照)

時代 … 江戸時代 宝暦九年(一七五九)

法量 … 縦八二・一cm 横三九・九cm

画賛・落款…(右端) 予病得愈茲一周有祈敬写/宝暦九己卯年七月七日

(左下) 源宗政(墨書)「號曰恒岳」(朱文方印)
(左下端) 円務院蔵之(墨書、別筆)

画像・表現…

獅子に騎乗する四面十臂の刀八毘沙門天を描く。顔は左右二方向に、各二面ずつ向ける。胸前の二臂は、右手に鍵、左手に宝珠を載せ、そのほかの八臂は、左右四本ずつ刀を持って外側へ向ける。獅子は表面を向き、開口して歯を見せる。尊像の身色は肌色で、丹で照限をつける。輪郭線は淡墨で筆勢は弱く、柔らかい表現に仕上げられる。眉は数本の線を重ねて毛描きし、口は丹で塗り朱で囲む。刀八毘沙門天は軍神として信仰されるが、本図は優し気な面立ちの若い男性形である。

④ 地藏菩薩像 絹本着色 掛幅装 一幅 (写真4参照)

時代 … 江戸時代 宝暦九年(一七五九)

法量 … 縦九四・五cm 横三八・五cm

画賛・落款…(右端) 予病得全治茲一周有祈敬写

(左端) 宝暦九^{己卯}歲閏七月三日/円務院寄附之

(左端中央) 源宗政(墨書)「號曰恒岳」(朱文方印)「□

□□□」(朱文方印)

画像・表現…

踏み割り蓮華に足を載せ、湧雲に乗り来迎する地藏菩薩を描く。

足先は雲の進行方向に合わせるが、顔は斜め右を向いて振り返る。持物は、右手第二指から第四指で錫杖を包むようにして持ち、左手は掌に宝珠を載せる。身色は白色で肉身線は墨線である。柔らかな描線で、庶民にも親しまれた地蔵を穏やかに表現している。

⑤ 勢至菩薩像 絹本着色 掛幅装 一幅 (写真5参照)

時代 ……江戸時代 宝暦九年(一七五九)

法量 ……縦八八・五cm 横二八・八cm

画賛・落款…(右端) 依有心願之子細勢至之尊像敬画之

(左端) 宝暦九_己卯年八月十八日円務院寄附之

(左端下) 源宗政(墨書)「恒岳氏_カ」(朱文方印)

図像・表現…

蓮台上に右足を上にして結跏趺坐する勢至菩薩である。両手は胸前で左右第四指・五指の指先を沿わせ掌を胸側へ向ける。頭上の宝冠中央には、僧衣姿の如来形を表す。身色は肌色で、細い淡墨線で肉身線を表し黄土色を沿わす。形を写し取ることに懸命であったのか、目皺の描写をはじめ筆線には堅さが残る。

⑥ 歡喜天尊像 絹本着色 掛幅装 一幅 (写真6参照)

時代 ……江戸時代

法量 ……縦一〇〇・五cm 横四一・二cm

画賛・落款…「宗政之印」(白文方印)

箱表墨書 ……宗政公御筆 山王権現神号/同 歡喜天尊像 二幅

箱蓋裏墨書…第四世 大如

図像・表現…

象頭人身の男女の歡喜天像が台座上の蓮弁上で抱擁する。画面上部には雲と幔幕を表し、歡喜天の秘匿性を象徴する。右象は左手に大根を持ち、左足を前に進めて左象に歩み寄る。二象が互いの鼻を寄せあい、瞳を交わす描写など丁寧を表す。身色は肌色で、淡墨で肉身線を施す。

⑦ 大日如来像 絹本着色 掛幅装 二幅 (写真7・8参照)

時代 ……江戸時代 宝暦十一年(一七六一)

法量 ……金剛界 縦六七・三cm 横三二・七cm

胎藏界 縦六七・五cm 横三二・七cm

画賛・落款…金剛界 「□□」(朱文印) 有願侵五更曉薰沐謹而書之

(墨書)

胎藏界(左端) 宝暦十一年辛巳年十二月七日

胎藏界(左端下) 源宗政(墨書)「恒岳」(朱文方印)

箱表墨書 ……宗政公御筆 胎金大日尊像 二幅

箱蓋裏墨書…宝暦十一年辛巳十二月七日

図像・表現…

連弁上に右足を上にして結跏趺坐する胎藏界・金剛界の大日如来像を二幅に分けて描く。胎藏界大日は腹前で定印を結び、金剛界大日は智拳印を結ぶ。輪郭線は墨線で描き起こしはない。

全体として、筆勢は穏やかで描線は柔らかく、祖父綱政、父継政の温雅な雰囲気画風を受け継いでいる。手本を写したためか、筆の運びがややぎこちなく堅さが残る描写もあるが、尊像の姿態の表現は比較的バランスがとれており、構図も安定感がある。

彩色面では、ぼかしや濃淡を巧みに使用し、着衣の文様なども丁寧に表現している。宗政の画技の高さが窺えるだろう。ただし、片山新助氏によれば、藩主の絵画については、藩の御抱え絵師が彩色を担当することもあった⁽³⁾。特に、宗政の父である池田継政はその彩色の殆どを絵師に任せたといい、宗政についても宝暦五年狩野三徳の奉公書に「正月早々より御絵彩色数々仕差上申候」とあり、絵師に彩色を任せたと記録が残る⁽⁴⁾。常住寺資料も、短期間での制作を考慮すれば、彩色を絵師に任せたと考えられる。

さて、賛によれば、①から④は病治癒を祝して仏を敬い描いた絵画で、⑤⑦は心願のためであり、⑥は制作年も不明であるため制作経緯は不詳である。

まず①から④の絵画制作について見ていこう。賛によると宗政は病気を患ったが、祈祷のおかげもあり全治することができたという。よって、翌年各尊像らを敬い描き、祈祷寺である常住寺に（仏の効験への御礼として）寄附したとある。病の治癒を祝す目的で描かれたこれらの絵画は、五月から閏七月の短期間のうちに四幅制作されている。ただし日付も各月でバラバラであることから、現存作例以外にも何点か制作された可能性がある。

では宗政の病とはどのようなものであったのか。「一周」とあるこ

とから、制作の前年である宝暦八年に病を患っていたと推察される。『池田家履歴略記』や岡山藩家老伊木家の『奉公書』を頼りにその経過を見てみよう⁽⁵⁾。

宝暦八年三月十八日、宗政は岡山を発ち江戸へ向かった。四月八日には江戸の藩邸へ到着し、同一五日に東叡山火警の役を命ぜられている。その後『奉公書』六月一四日の記事に「殿様御不例」とあり、宗政は体調を崩したようである。しかしながら、半月後の七月朔日には「殿様御順快後始而御染筆被遊候」とあり、順調に回復した。八月二一日の『奉公書』には「殿様御全快御床揚御祝儀御吸物頂戴之仕従」とあり、この時点で全快したことが分かる。宗政はこの後、宝暦九年四月一八日に江戸を発ち、五月五日に岡山に帰城した。

以上の記事から、絵の制作動機である発病や治癒は江戸滞在中になされたと分かる。そして、青不動像の制作時期が宝暦九年の五月晦日であることから、帰城後一か月以内には制作を始めている。

病治癒の礼として、藩主自筆の絵を祈祷寺に大量に奉納する例は、ほかに確認できていないが、宗政が仏神へ篤く帰依していた様子が窺える。病の詳細や、絵の主題の選定などについては今後検討したい。

次に、⑤の勢至菩薩は、心願の子細有るに依りて尊像を敬い描いたと記すが、その詳細は不明である。⑦は経典と関わりがあるため、後述したい。

〈経典〉

いずれも木箱入りで、軸首は水晶。裏面に金銀箔を散らす。箔の

大きさは金剛寿命経のみやや大きい箔片である。般若心経は表紙を欠失する。次にその概要を示したい。

① 法華経二十八品要文 紙本墨書 卷子 一卷 (写真9参照)

時代：江戸時代 宝暦十二年(一七六一)

法量：縦二九・一cm 横一六三・九cm

奥書：依有心願事宝暦十一辛巳年仲冬日／源宗政謹書(墨書)／

「宗政之章」(白文方印)「恒岳」(朱文方印)

箱表墨書：宗政公御筆／法華経二十八品要文

箱蓋裏墨書：御寄附 宝暦十一^辛巳仲冬吉日 金剛山常住寺／大如誌

② 仁王般若経護国品偈 紙本墨書 卷子 一卷 (写真10参照)

時代：江戸時代 宝暦十二年(一七六一)

法量：縦二九・三cm 横一四六・四cm

奥書：有願薰沐謹而書之宝暦／十一辛巳年十二月十一日／源宗政

(墨書)／「宗政之章」(白文方印)「恒岳」(朱文方印)

箱表墨書：宗政公御筆／仁王般若経護国品偈頌

箱蓋裏墨書：御寄附 宝暦十一^辛巳孟冬十一日 金剛山常住寺／大

如誌

③ 般若心経 紙本墨書 卷子 一卷 (写真11参照)

時代：江戸時代 宝暦十二年(一七六一)

法量：縦三〇・一cm 横一六八・六cm

奥書：有願侵五更曉薰沐謹而／書之宝暦十一辛巳年十二月十五日
／源宗政(墨書)／「宗政之章」(白文方印)「恒岳」(朱文
方印)

箱表墨書：宗政公御筆／般若心経

箱蓋裏墨書：御寄附 宝暦十一^辛巳季冬十五日金剛山常住寺／大如誌

④ 吉祥神呪 紙本墨書 卷子 一卷 (写真12参照)

時代：江戸時代 宝暦十二年(一七六一)

法量：縦三〇・〇cm 横七〇・八cm

奥書：于時宝暦十一辛巳歲十二月／十六日有願侵五更曉沐／浴齋戒

謹而書之則寄附／金剛山常住寺者也／源宗政(墨書)／「宗

政之章」(白文方印)「恒岳」(朱文方印)

箱表墨書：宗政公御筆／吉祥神呪

箱蓋裏墨書：御寄附 宝暦十一^辛巳十二月十六日 金剛山常住寺／

大如誌

⑤ 金剛寿命陀羅尼経 紙本墨書 卷子 一卷 (写真13参照)

時代：江戸時代 宝暦十二年(一七六一)

法量：縦三〇・五cm 横三八三・九cm

奥書：仏言誦誦此経者能令／寿命色刀皆得成就况／於書写也其功無

量也／故予親書此一軸奉祈／慈父継政公之寿域万年／云爾／

宝暦十二壬午年二月朔旦／孝子源宗政謹書(墨書)／「清和

苗裔」(朱文方印)「宗政之章」(白文方印)

箱表墨書・宗政公御筆 金剛壽命陀羅尼經

箱蓋裏墨書・御寄附 宝曆十二^{壬午}二月朔旦 金剛山第四世ノ大如

これら經典の制作は宝曆一一年仲冬から宝曆一二年の二月朔日の短期間のうちに行われている。一二月中に制作された②から④については、書写前に薫沐や沐浴をして身を清めており、余程の願いがあったと思われる。前述の仏画の⑦(大日如来像)が同様の奥書を持つことから、これも一連の制作と位置づけられる。

⑤は奥書によれば父である継政の長寿を願い制作したとある。ここでは印章に朱文方印「清和苗裔」を使用している。

〈書軸〉

山王権現神号 絹本墨書 掛幅装 一幅 (写真14参照)

時代・江戸時代

法量・縦九九・四cm 横四一・三cm

箱墨書・歡喜天尊像に同じ。

二 池田宗政

池田宗政は、岡山藩主池田継政の嫡男として、享保一二年(一七二七)に江戸で誕生した⁽⁶⁾。母は仙台藩伊達家より嫁いだ正室和子である。幼名は峯千代といい、初め茂十郎尚政と名乗った。元文五年(一七四〇)に加冠して従四位下に除し弾正大弼を兼ねると、將軍の偏諱を受けて宗政と名を改めた。寛延元年(一七四八)

正月、筑前候黒田継高の女藤子を娶り、一〇月には伊予守と改め、同年一二月に侍従に昇進した。宝曆二年(一七五二)、父継政の跡を継いで岡山藩主となり、その後宝曆一四年三月一〇日に、三八才の若さにして亡くなった。また、水戸の鶴千代や加賀の勝丸、出雲の幸千代らとともに、当時四君子と称されたという。

従来岡山藩主の書画といえば第二代藩主綱政や、第三代藩主継政、第五代藩主治政らが注目されてきたが、一章でも紹介した通り、宗政も書画を深く嗜んだ藩主であったと推察される。宗政は自筆の絵を寺だけでなく、家臣に与えることもあった。例えば、伊木家の奉公書を見ると、宝曆八年三月一三日に「板行毘沙門天之像」、同九年五月二日に「唐船之図」、八月二三日に「花蠶之図」、宝曆一二年二月二日に「波二月之図」などの絵が伊木家に贈られている⁽⁷⁾。このほかにも御後園(後樂園)において、宗政が御絵遊ばすといった記録が残り、日頃から熱心に制作した様子が窺える⁽⁸⁾。主題については、現存する宗政の書画資料を見ると、山水図や花鳥図、人物図まで幅広く手掛けたようである⁽⁹⁾。現況で確認されている宗政の仏画は少ないが、今後調査などで発見されることも多いだろう。さて、宗政は宝曆二年に父から藩主の座を受け継ぎ、宝曆一四年に亡くなったため、宝暦年間が宗政の治世であったことになる。よって一章で紹介した仏画や經典の制作は、いずれも藩主在任中の制作となる。寺社などに対して目立つ業績はないものの、常住寺資料からは、神仏への祈りを込め真摯に仏画制作・写経を行った姿が浮かび上がる。

三 藩主と常住寺

常住寺は、正式には金剛山常住寺円務院と称し、聖観音を本尊とする岡山藩主の祈祷所であった⁽¹⁰⁾。元々は津高郡江与味村（現加賀郡吉備中央町栗井谷、杉谷および久米郡美咲町江与味）にあり廃れていた円城寺末の玉泉寺を、池田綱政が円務院と改称させ、岡山城下の内山下石山に再興して池田家の祈祷所としたものである。住職は、円城寺が兼帯していた祈祷所である円務院の住職がその任を申しつけられ、宝永四年（一七〇七）九月一〇日に東叡山寛永寺の直末に列することとなった。同年一〇月二七日に伽藍の再建が始まり、翌年三月三日には完成して入仏式が行われた。

明治五年（一八七二）には、上石井にあった興国山長延寺と合併し同所に移ったが、その後和気郡藤野村南光院に再び合併移転し、大正八年（一九一九）二月二日に岡山市門田屋敷にある現在地に移った。本堂は宝永四年当時のものである。

『池田家履歴略記』は円務院（常住寺）造立の経緯などを詳しく記す⁽¹¹⁾。これによれば、綱政は造立の様子を視察のため現地に度々足を運び、曹源寺から延命堂を移している。円務院は「国家安全武運長久子孫繁栄」の目的のために建立されるとあり、綱政にとって円務院の造立は重要な一大事業であったことが分かる。また、御城内の祈祷は利光院が務めていたが、宝永五年（一七〇八）十二月からは円務院に代わった。

『撮要録』には、明和八年（一七七二）四月における円務院石垣修繕の際の絵図が載るが、周囲に石垣を廻らし、立派な門前に石段

を数十段備えた格式ある寺の様子が窺える⁽¹²⁾。

このように常住寺は綱政の肝煎りで建立された寺であったが、その後歴代藩主にも篤く信仰されたようで、藩主の日記などには、円務院（常住寺）へ訪問する記事が度々見られる。宗政の父・継政も常住寺に書画を数点納めているが、中には宝暦六年に、初代住職の法随法印を描いた肖像画もある。その画中には金剛山の開基法随阿闍梨が継政の若い頃より祈りの僧であり、今もその面影を覚えており、継政自らがその像を描いたと記している。

本稿で紹介した書画などには、第四世大如の名前が見られたが、宗政も住職と懇意にし、藩の繁栄などを願う祈祷を行ったのだろう。そのような環境下において、藩主による仏画の制作や写経も営まれたと考えられる。

おわりに

本稿では岡山藩主の祈祷寺であった常住寺円務院に伝わる、池田宗政の書画を中心に宗政と常住寺について紹介した。宗政の画業については、三代継政と五代治政に挟まれ、これまであまり注目されてこなかったが、展覧会や資料紹介を介しその姿が明らかになってきている。本稿で紹介したような仏画・写経類についてはその多くが寺社に納めたと思われる、今後益々発見されていくだろう。

常住寺は廃藩後に流転の運命を辿ったが、運良くも本堂や多数の資料が伝わった。寺に遺る藩主ゆかりの資料からは、藩主の帰依を受けた祈祷寺としての往時の隆盛が偲ばれる。

《註》

- (1) 槌田祐枝「池田宗政の学び―林原美術館所蔵の資料から―」（『吉備地方文化研究』第三二号 就実大学吉備地方文化研究所 二〇二二年）。令和二年には林原美術館において企画展「博学多才―池田宗政の学びとその生涯―」が開催され、宗政関連資料が多数出陳された。
- (2) 備前市・妙因寺にも宗政自筆の白衣観音像の作例があるが、その観音像は舞台上に斜め向きに坐る。（『岡山城史』岡山市 一九八三年、一四〇頁掲載）
- (3) 片山新助『岡山藩の絵師と職人』山陽新聞社 一九九三年
- (4) 「狩野伝奉公書」（池田家文庫）。前掲註（3）片山著に翻刻があり、本稿でもこれを参照した。
- (5) 吉田徳太郎編『池田家履歴略記』上巻 日本文教出版 一九六三年
備作史料研究会編『備作之史料 七上 伊木若狭（一〜三）』備作史料研究会 二〇〇四年
- (6) 宗政の経歴については次を参照した。
岡山城史編纂委員会編『岡山城史』岡山市 一九八三年
神原邦男「備前岡山藩主池田治政の二〇〇年遠諱にあたり」（『池田家の至宝と曹源寺』林原美術館 二〇一七年）
- (7) 前掲註（5）『備作之史料 七上 伊木若狭（一〜三）』
- (8) 神原邦男『大名庭園の利用の研究―岡山後楽園と藩主の利用』吉備人出版 二〇〇三年 二〇八―二一〇頁
- (9) 前掲註（1）槌田論文
- (10) 常住寺については次を参照した。
『岡山市史』第五卷 明治文献 一九七五年 三五二四―三五二六頁
- (11) 前掲註（5）吉田書 六二四頁
- (12) 吉田研一編『撮要録 下巻』日本文教出版 一九六五年 一一五二―一一五三頁

謝辞

執筆にあたっては、所蔵者の常住寺御住職に格別の御高配を賜りました。また林原美術館学芸員の槌田祐枝氏には宗政の画業について、当館副館長横山定氏には賛や落款の翻刻について御助言を頂戴しました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。